
葬儀

紫

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葬儀

【Nコード】

N2662Y

【作者名】

紫

【あらすじ】

これは、初恋だったのかもしれない。

今思えば、たくましさの中に寂しさを持つ人だった。

（死んだのか）

私は、そんな寂しいこの人を恨んでいたりもした。

（何て、残酷なのだろう）

だけど、本当は好きだったりもした。

ゆらゆらと揺れる篝火が不意に消えた。思わず小さく声を上げたのは私だけだった。いや、私以外に誰もいないこの空間で、一体誰が声を上げると言うのか。

『本当に残酷なものです。徳の高い人、まだこの世にいないてはならない人ばかりを連れて行ってしまっ』

火がなくなつた灯籠を見詰めて、少し息を整えさせる。ラジオから聞こえる声に、私は耳を澄ます。ぶつぶつと千切れる音の中に、低い男の声。泣いているようだ。誰か、大切な人でも亡くなつたのだろうか。

（残酷……か）

人の死をまともに見た私は、少なからずのダメージを心に受けていた。真っ黒な棺の中に詰め込められた遺体を見て、それから、焼かれた骨を一つ拾って。もくもくと空を彷徨う黒い煙はあの人のものだった。

（……………）

不思議と、視界は曇っていなかった。おかしい位に、頭の中はクリアで、何も無い。空っぽの脳の中を、一つの問いがぐるぐると回る。心の中にぽっかりと空いた穴は、火が入っていない灯籠みたいだ。

私は冷えた己の体を抱いて、静かに呻き、流れるはずのない涙を待って、眠った。冷え切った足の先は上手く動かなくて、まるで死人のようだと、誰かが笑ったような気がしたけれど、それはただの空耳だった。

金魚を、と言ったところで先生は口籠り、何かぶつぶつ唱えながら考え事を始めた。私への言葉を選んでいるのか、ただの演技なのか。いや演技にしては安っぽい。

「金魚をどうぞ」

まあ、わかっていた。

先生の無骨な掌は、丸い金魚鉢をがちり支えている。中で泳いでいる紅いドレスのお嬢さんは、少し居心地が悪そうに、小さな海藻の周りを旋廻していた。

「急に言われても。私が断らないとでも、思っていたのですか」

「可愛いじゃないか。真っ赤なおべべが」

なあ？ 金魚に先生は話しかける。金魚は何事もなかったかのように、砂利をもぐもぐと口の中で遊ばせている。私は盛大な溜息を洩らしてから、

「受け取ります。受け取ります」

と言って、金魚鉢を乱暴に受け取った。水面に大きな波紋。
「風流でしょう。私が取ったのですよ」

「どうせ屋台の金魚掬いで取りすぎたんでしょう？」

「何故わかったのですか？」

何故、そこで否定しないのか。

先生から受け取った金魚は、翌月死んだ。

「生きているものはいつしか死ぬものですし」

そう言つて、先生は腕まくりでむき出しになった、骨っぽい腕を泥まみれにさせながら、金魚の墓を作っていた。本当は私が餌をやらなかったからあの金魚は死んだのだ。あの金魚鉢に入っていた海藻が綺麗に無くなっているのを、先生は見てみぬふりをした訳ではない。

「何故私を責めないのですか」

「あなたを責めても何も起こらないでしょう」

何も起こらない。金魚は生き返らないとでも言いたいのか。それとも、私が何を言つても変わらないような、冷酷な人間だと先生は思っているのか。

先生が先生と呼ばれる理由は至つて普通だ。先生は近くの学校で先生をやっている。だから周りの人間は先生を先生と呼ぶ。私も先生を先生と呼ぶ。先生は人の名を呼ばず、あなた、とか、ねえ、とか言つて呼ぶ。

私が、先生お手製の金魚の墓を眺めている時、先生はいつも空を見上げていた。曇りの日も、晴れの日も。雨の日もだ。

「先生も死んだら、土の中に入りますか」

意地悪で言つたつもりだった。

「そうですね。でも私はその前に焼かれます」

何故か酷く泣きたくなった。

先生は温厚で、物腰柔らかなところが周りの人々に良く気に入ら

れたが、私はそうとは思わなかった。ああいう人間には必ず深い闇があるという事を知っていたからだ。私はとにかく先生を毛嫌いして毛嫌いして、先生には皮肉ばかり言うようにしていた。

「先生、私はあなたが大嫌いです」

この言葉だけは、面と向かって言えないので、生前の金魚に向かって毎朝毎朝言ってやった。すつきりはしなかったが、心の空っぽな部分が何かでちよつと埋まった。

先生が何故死んだか私は知らない。私が先生を嫌っていることを知ってるから、皆は私をちよつと嫌っていた。だから、どうして先生が死んだのとか、先生は死ぬ直前どうしてたのとかは教えてくれなかった。

(……………)

でも今思えば、先生はいつも私の傍にいた。それが悔しかった。

「同情のつもりですか」
「いいえ」

ふと、目が覚めた。どうやら今までの事の夢を見ていたらしい。瞼を何度も擦りながら、何てタイミングの悪い。と悪態を吐いてみた。睫毛に触れた指先が、少し濡れた。

「同情のつもりですか」

今度は、返事がなかった。ラジオの葬列現場のニュースを聞きつつ、私はもう一度眠ることにした。

（後書き）

愛は形がないから、よくわかりません。愛が憎しみに変わって人を殺すのがありますが、人を殺すほどの憎しみからふと気づくのもまた愛だったりします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2662y/>

葬儀

2011年11月6日02時14分発行